

(桐蔭学園) 教室をコントロールする

by 関谷吉史

アクティブラーニング型授業がうまくいくと、活発な議論が行われ、豊かな学びが生まれます。しかし、そこは中高生のことですから、つつい夢中になって、度を越えて盛り上がりすぎたり、学びの場であることを忘れたような振る舞いをしたりすることもあります。

アクティブラーニング型授業では、教員が教室をコントロールすることが、講義中心の授業と同様、あるいはそれ以上に重要になります。

本項では、生徒が学びに向かうために教室をコントロールすることについて、桐蔭学園で行われている取り組みを少し紹介しましょう。

第1節 ペアワーク・グループワークの原則

ペアワーク・グループワークの原則

目標:
「互いの考えを伝え合おう」

互いが考えを理解し合うために

【話し手】 1 相手の方を向いて話そう
2 笑顔で話そう

【聞き手】 1 笑顔で受け止めよう
2 時にはうなずこう

ルール
関係ない話はしない

中学校・中等教育学校前期版

ペアワーク・グループワークの原則

目標:
「社会につながる深い学びのために、互いの考えを伝え合おう」

深く学び合うために

1 相手の方を向いて話そう
2 相手の話を誠実な態度で受けとめよう

ルール
関係ない話はしない

高等学校・中等教育学校後期版

全教室にこうしたポスターを貼りだしています。2015年4月のアクティブラーニング始動に先立って行われたアクティブラーニング推進委員（AL委員）の合宿で、大学ならばともかく、中学校段階では、共通の目標やルールがあったほうがいいのか、それが視覚化されているのいいのではないかという議論がありました。そこで、ミーティングやAL委員のメーリングリストで意見交換がされ、このようなポスターができました。

高校・中等後期版の目標に「社会につながる深い学び」とあります。AL導入は、生徒たちが大学・社会で力強く活躍することを目指すものであることを示しています。中学・中等教育前期でも事情は同じですが、生徒たちには大学・社会への距離感がまだあり、このフレーズを意識しづらかったと思われました。そこでまずは「互いの考えを伝え合う」ことじたいに「まことをつくす」（桐蔭学園の校訓の一に、「すべてのことに『まこと』をつくそう」）ことを目標としました。実際の授業で、社会につながる深い学びを目指すことは変わりません。

振る舞いについては、中学・中等教育前期版の方が、より具体的になっています。特に強調したのは「笑顔」です。高校・中等後期となると、「誠実な態度」で話し・聴くことを指針としています。

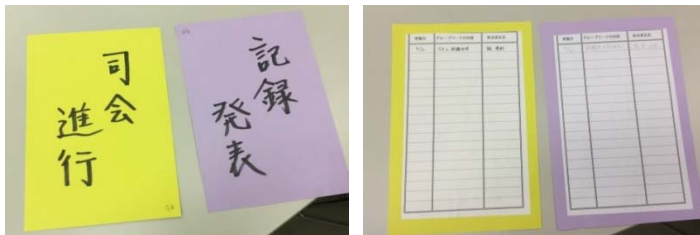
ペアワークやグループワークを始める前に、この原則ポスターを確認することで、生徒も教員も方向性を見失うことなく学びに向かうことができます。

第2節 姿勢ポスター



AL委員のひとりが描いたポスターです。これも全教室に貼り出しています。姿勢の悪い生徒がいたら、何も言わずにこのポスターを指さすなどしています。生徒自身が自分の状態を認識できるようにしています。もちろん、厳しく叱ることもあります。

第3節 その他



- ・ ペアワークやグループワークをはじめるとき、だれと組むのか、どのように机をつけるのかなど、はっきり理解していないと、生徒はとまどってスムーズに動けません。また、ワーク全体の流れをつかめないと、なんとなく弛緩した雰囲気になることがあります。そこで、配付プリントの裏面やプロジェクター等で、組み方やワークの流れを示すことがあります。これだと、生徒は自分で動きを確認しながら学びを進めることができます。
- ・ 役割カード（画像）を作って、使用している教員がいます。特に中学段階で使われることが多いようです。
- ・ 毎回の授業の流れをある程度パターン化することも有効です。慣れてくると、生徒たちは驚くほど速やかに机の移動をしたり、ワークを始めたりします。ああ、はやくグループワークで学びたいのだなと思わされることもしばしばです。
- ・ 指名方法を工夫することで、授業に緊張感が生まれます。乱数発生アプリや名前カードを用いてランダムに指名する方法がよくとられています。
- ・ 発表に先立って、発表生徒がクラス全生徒に対して「聴く権利を求める」挙手を促すという取り組みをしている教員がいます。全員の挙手を確認するまで、発表生徒は説明をはじめま

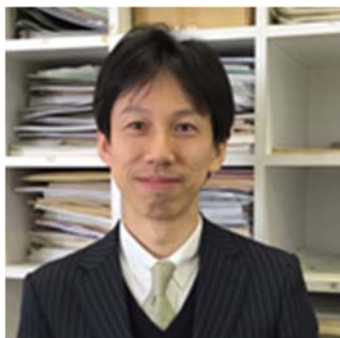
せん。

以上、いくつかの取り組みを紹介しました。アクティブラーニングにおいては生徒の主体的な学びが重要ですから、生徒が自分の学びの状態に気づき、よりよいものにしていけるように促すことが大切です。ただし、これはすべてを生徒に委ねることではありません。教員が厳しい態度で臨むことも時には必要でしょう。もちろん、叱ることがあまり多くなると、生徒は教員の顔色を窺うようになります。

社会につなげる学びのために、教室をどのようにコントロールするのがいいのかについて、教員ひとりひとりが自ら考え続けることが大切でしょう。

プロフィール

関谷 吉史 (せきや よしふみ)



- ・ 学校法人桐蔭学園 国語科教諭 (古典)。一貫教育推進部次長。『桐蔭 AL 通信』担当。
- ・ 一言： 2015 年 4 月のアクティブラーニング導入以来、授業について考えるときに、自分の教え方よりも、生徒の学ぶ姿を重視するようになりました。生徒も教員も、学ぶことの喜びと奥行きを感じられるような授業をしたいと思っています。